

## 主と同じ姿に

「コリント人への第二の手紙」3章 12～18節までを朗読。

18節「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」。

信仰生活の目標は何か、よくそういう事を考えさせられますが、イエス様は「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」(ヨハネ 15:16)とおっしゃいます。それは行って、実を結ぶためであると言われてます。そう言われると、何が私にとって実であろうかと思う。この世の業績、成績、結果を考えます。神様が私に期待しておられることが出来たであろうか。何が出来たか、どれだけの事が出来ただろうかと考える。それが実であると思しやすい。しかしイエス様はそういうわざをせよと語っておられるわけではありません。

確かにイエス様は「この小さき者にしたことはわたしにしたことである」と言われます。神様の愛のわざ、具体的に何かすることを勧められてもおられます。強盗にあった人を助けたよきサマリヤ人の記事があります。祭司やレビ人といった神に仕える人々は見て見ぬふりをして去って行く。ところがサマリヤ人、彼らはユダヤ人からすれば、異邦人と言いますか、神様に見捨てられた民と思われた人が、傷ついた人を介抱する。「あなたの

隣人を愛せよ」と言われ、愛するとはこういう善きわざをする、この世の道徳的な、多くの人々が称賛するような倫理的な行為、これが実を結ぶ生活。そういう風に理解している。神様はそういうわざ、いわゆる慈善、善きわざ、道徳的、倫理的な、世のため、人のために尽くすことを喜んでくださる。それも幸いなことに違いないし、イエス様も大いにそれを勧められます。

しかし絶えずイエス様が問題になさることは、動機がどこにあるかです。何かしようとする時、必ずそこには動機があります。利益のため、あるいは面子と言いますか、自分の名誉のため、あるいはある人のためにやむなく義理や人情、そういうものに動機があることもあります。また自我のため、自己充足、欲望を満たすこともあります。世のため、人のためにしながらも、そこに自我と言いますか、自分の名誉欲、所有欲、様々な欲が働きます。それによって、見たところ、外見的には善き行いに見えます。「あの人は立派な人だ」と賞賛される。世間にはそんな人がたくさんいます。財を費やし、時間、労力を費やして、様々な事をする。先だっても、アフリカの奥地に出かけて行って、そこで小学校をつくったり、村のために衛生状態の改善に努めたりするボランティアの人のドキュメントを見ました。日本人も大した事をするものだと感心しました。立派な事をしているなど思います。別に悪い事をしているわけではありませんから、称賛されてしかるべ

きだと思えます。

ところが、神様が私たちに求めておられることは何かというと、外側に表れ出した行為、わざを問われているではありません。「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(サムエル上 16:7)とあるように、神様は私たちの心の思いを知り給うお方。人は我利我欲、自我性、自分というものがどうしても抜きがたい、それが強い力をもって支配してきます。ですから人のためにしているようで、自分を無にして、自分のためではないと言いつつも、百パーセント純粹に、自分を捨ててかかっているかということ、必ずしもそうではない。親が子供を育てるのでもそうです。美談として、親は子供のために、自己犠牲を限りなく果たすものだと思われていますが、決してそうは言えません。育てる親の心には、なにがしかの自己充足、自分の求めているものを達成しようとする思いが働きます。私たちはあくまで何をやるにしても、そこには常に、「自分が」、「自分が」という自我、そういう思いが常に働きます。その思いの中には、神様の存在が抜けている。神無き世の中ですから、人がすることを外側から量ります。なすわざを見て、評価します。立派な人、良く出来た人。そういう捉え方をします。しかし神様が私たちに求めていらっしゃるの、私たちが新しく造り変えられることです。イエス様のところに来たニコデモに、イエス様がおっしゃったのは、「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ 3:3)と。新しく生まれ変わる。これが、神様が私

たちに求めている実です。言い換えると、私たちのすることよりも、私たち自身がどういうものであるか、自分がどうあるのかということです。

先だって、ある方が「先生、今日初めて先生の話聞いて、目からうろこ、今まで気づかなかったことをはっきりとさせていただきました」と言います。何かということ、「今日、お話を聞いて、実を結ぶことが、ヨハネの 15 章にあるように、『わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝であると、わたしにつながっていなさい、そうすれば、実を豊かに結ぶようになる』とあって、私はイエス様に従って、どういう事をすればよいのだろうか、何をすればその実になるのだろうか、これまでずっと求めてきました。今日、私たちはその枝であると同時に、その実でもあるのだと。何か結果が求められているのではなく、私たちがどういうものとしてそこに存在するか、それが実でもあることを知りました」。自分自身が変わる事です。新しく造られる事こそ、大切です。その造られるとは、何が造られるのか。私たちが変わるのです。よくいろいろな方々の悩みを聞きます。別に悩み事の相談所ではありませんが、「私はこんな悩みがあつて」、「こんなことをされて」といろいろな事を言われる。確かにそういう悩みがあるだろうけれども、「じゃあ、あなたが変わったら、いいじゃない。「だって、あの人が変わるべき、この人が変わるべき」「いや、違う。あなたが変わらなければ」と。私たちの一番の問題はそこです。自分が変わる。そう

言われると、いつも逃げられます。ある人は息子さんがなかなか優秀でした。それで親は大変期待していました。やがて東京の有名な大学に進学しました。お父さんも、お母さんも大喜び。そうしたら、その子供は入学するなり、勉強に精を出すことを忘れてしまった。自分の趣味である音楽にのめり込んだ。クラシック音楽が好きで、素人のオーケストラに参加し、その活動に忙しくなった。三年生になって、学校の方から父兄に「お宅の息子さんは単位が滞っているため、四年生になることができない。それどころか、卒業が難しい」と。親御さんはびっくりしました。そして叱咤激励しましたが、とうとう留年する。最後は8年、都合、大学を二回行ったような結果になりました。そのお母さんが心配して、尋ねてこられた。「もう一度、やり直しをしなければいけない。息子をなんとか変えられないだろうか」。私が「それは無理でしょう。だったらお母さん、あなたが変わったらどうですか」と言うと、怒ってしまい、「先生は私の事、何もわかっていない。私のどこが変わることがあるでしょう。私は息子のために、どんなに費やしてきたか。先生は知らないから、そんな勝手なことを言われる」と言われ、それっきり来なくなりました。

問題の中心は、誰が悪い、彼が悪い、あの状況、この状況、こうだからではなくて、実はその中に置かれている自分が変わらなければならないのです。まず新しく生れなければならない。これが、神様が私たちを救おうとする目的でありま

す。「先生、うちの主人は本当に頑固者で、私がこんなに熱心に教会に励んで、祈っているのに、主人は信仰に見向きもしない。「なんとか主人が変わらなければ」と言われる。私は「変わりません」と言った。「そうでしょうか」。「あなたが変わらないじゃないですか。あなたが変わらないのに、人が変わるわけがない」。私たちを救うとは、何を救うのか。私たちをもう一度、新しく造り変える。神様は私たちを造って下さった。聖書に書いてある通りです。人が造られた時、今のように造ったのではなかった。私たちを造った時、神様は、ご自分のかたちにかたどって、ご自分の尊いいのちを吹き入れ、神に似た者として、神に最も近い者として造って下さった。エデンの園の生活は、神と人とが、何一つ隔てなく、よき交わりを持つ関係の中に置かれた。だから裸で恥じない。何もかもお見通し。神様の前に隠すところがない。神様の前に裸ですから、人に対しても裸です。そういう完全に神様と一つ、まあ、一つというわけではないのですが、神様はあくまで神様ですけれども、その神様と人とが一つであった。これが人の人たる生き方。一番の大切な所です。

ところが、人が神様に背いて、罪を犯し、祝福を受けることができなくなる。恵みにあずかることができなくなって、神と人とが断絶してしまいます。その大きな原因は罪です。罪の元凶、一番の罪の根源は、「わたし」という自我です。なぜならば、「俺が」というものが、神にとって代わろうとしたこと、これが罪です

ね。「私が一番正しい」、「私の言うことが正しい、私は間違っていない」、「私の考える事こそ私の人生の最善、私はこうしたいと願いながら、どうしてそうならないの」と、常に「自分が」、「自分が」と思う。そして私はこうでなきゃ嫌だ、こうすべきだ、ああすべきだ、そこにしがみつく。だんだん年をとると、そういう焼き冷ましの餅のようになります。自我のかたまりになる。その罪のゆえに、神様はご自分のひとり子をこの世に遣わして下さった。そしてイエス様があの十字架に砕かれて下さった。砕かれるとは、私たちの罪、自我を、あの十字架に釘つけてしまうことです。キリストと共に死んだものとなる。死ななければ、人は新しく生れ変わることはできない。死ぬとは、この世に生きているいのちを捨てるわけではない。肉体のいのちは限りがありますから、どうしなくても死にますから、ほっておけばよい。大切なのは、私たちの内にある自我、これを打ち砕く。それがイエス・キリストの十字架です。

私たちはその罪のゆえに、神様の祝福を受けることができず、神様の呪いの中に置かれていたのです。その結果、喜べない、感謝できない、望みがない、平安がない、つぶやきといらだちと憤り、どんな事を見ても腹が立つ、不満、不満の人生。それは、私の自我が神となり、これこそが私の神だ、その己を神としていく。これは私たちが常に向かい合っている事です。パウロがそういったように、「我キリストと共に十字架につけられたり」、私もキリストと共に十字架に死んだ。

死ぬとは、自分を捨てることです。そのためには、十字架が誰のためであり、イエス様の死がどれ程自分にとって大きなものであるか、自分がどんな罪人であるかを、徹底して知らなければ、十字架が自分のものとなりません。

パウロは肉と情とすべてを十字架に釘づけたと語っています。それは私たちが死んで、もう一度、新しくよみがえり、新しく生きる者となる。今、私たちもそのことを信じて、イエス・キリストの十字架のあがないを受けた。「これは人のことではない、私のことです」と、告白して、洗礼を受けました。新しく造り変えられる。そして今、私たちは神の子とされた。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」(ヨハネ第一 3:1)。父なる神様がどんなに大きな愛をもって、私たちを神の子としたのか、よくよく考えなさい。どんなに神様は私を愛して下さったか。私のためにひとり子をも惜しまないで、十字架に釘づけ、私たちの古い自我、古いものを全部捨て去って、十字架に処分して下さったのです。だから、何があっても、良いも悪いもないわけです。主がよしとおっしゃるなら、どんな事でも構わない。自分は死んで、自我が十字架に砕かれてしまった。粉々になってしまった。大きな岩は風には動きませんが、岩を砕いて、砂にしてしまえば、風によっていくらでも変わります。どんなところに置かれようと、そこで感謝して生きることができるのです。

なぜなら、「私」がないからです。いつも不安があったり、心配があったり、思い煩いがあったりするの、己があるからです。自分を捨てきれないからです。あのエステルのように、「死ぬべくば死ぬべし」(エステル4:16)、「死ななければならぬなら死んでもよろしい」と、ここまでイエス様に密着していこうではありませんか。いつまでも自分を握っているものだから、「あんなことされたら嫌だ」、「こんなことされたら嫌だ」、「あんなったらどうしよう、こうなったらどうしよう」と悩みます。いいじゃないですか、どうなるろうとも。主が十字架にすべてを釘づけ、罪をあがない、あなたはわたしのものだと私たちを握って下さった。そして主の手に握られ、持ち運ばれている。今、置かれている事情境遇、問題事柄、誰がした、彼がしたではない。そこにこそ、神様の深い、測りがたい知恵があり、ご計画があるからです。そこに自分を捨ててかかれないと、これはどうにもなりません。

イエス様が、私たちのためにすでに贖いを完成して下さった。もうこれ以上、何もすることがない、救いを全うして下さった。今、私たちにボールが投げられている。さあ、それにどう応答していくのか。そして、神様が私たちに求めたもう、結ぶべき実は何か。私たち自身を神様の前に、ささげていくこと。そのささげるとは、自分を徹底して捨て去って、私たちがキリストの姿かたちに変えられていくこと。神様の子供にさせていただ

た。だから私たちはいつもイエス様と共に歩いていく。どんな時でも、イエス様は私と一緒にいらっしゃる。そのイエス様を見つつ、イエス様の声を聞きつつ、イエス様のなさるわざをまねしていくのです。

「ペテロの第一の手紙」に言われているように、「御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである」(ペテロ第一2:21)。イエス様は、父なる神様に徹底して信頼して、どんな問題や事柄に置かれようと、「父よ」「父よ」と、父なる神様に信頼し、委ね、父なる神様のなさるわざに徹底して従われ、あの十字架の死に至るまでも従順に従いました。

そこまで私たちもイエス様に倣う者になりたい。神の家族、神の子供として下さった。だけど、いつまでたっても、よその子みみたいな顔している。イエス様は神の家族の長男となって下さった。二男、三男、四男、…、私たちは何番目か分かりませんが、いずれにせよ、兄弟の一員です。ですから兄弟姉妹と呼び合うわけでしょう。神の家族、だったら、子供は親に似るものです。キリストに似るものとなっていく。神様に似るものとなるのが、私たちの結果、実であります。これが大切です。そのためにはどうするのか。イエス様を絶えず心においていく以外にない。「主は何とおっしゃるだろうか」「イエス様はどうなさるだろうか」。イエス様は父なる神様に信頼し、十字架に至るまで、父なる神様に、従順に従いぬいて下さった。

子供は、親に似ていきます。わが家に来る小さな子供がいます。4歳ですね。お父さんと一緒に来て、お昼を食べる。何を食べたいと聞くと、「ラーメン」と答える。まだ4歳ですから、小さい器に、お汁をこぼすからと言って、親が麺だけを取ってやる。すると、本人がダメだと言って、自分ですくって、スープをかける。ちょうどいい具合になる。それでお父さんも食べる。すると息子が、チラッとお父さんの方を見る。何で見ているのかというと、お父さんが箸ですくって、フーフーとする。すると4歳の子が真似する。そのうち、お父さんがお椀をもって、スープをすすると、その子もズーとする。私は「なるほど、こうやって、親の癖、親の仕草、親の様々なことがこの子供にうつっていくのだなあ」と感心しました。親子はたまに会うわけではなく、どんな時にも一緒にいますから、その親の仕草、お父さんの言い方とそっくりだと思いません。私たちにも、神様は、キリストの姿を造り出したい。ところが、私たちはたまにしかイエス様と会わないから、なかなか似ない。パウロが「**ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい**」(テモテ第二 2:8)と語っています。語り口、手の仕草、歩む格好、本当に似てきますよ。

教会学校に来ている小さな子供を見ると、これは誰さんの息子、誰さんの娘と、すぐに分かります。言う事、する事、言葉遣い、端々に親の姿が見えてく

る。自分を振り返って、鏡に映してみても、どこにキリストの姿があるでしょうか。キリストが私たちの内に造り出されていく。そのために神様は私たちのうちにキリストの霊を注いで下さる。ペンテコステの出来事は、私たちに力を与えて、私たちを造り変えて、神の証しをしようとしている。18節に、「**わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである**」。この前半のところ、12節以下に、モーセがシナイ山に上って、神様の臨在に触れて、ふもとに待っていたイスラエルの民のところに戻ってきます。その時、モーセの顔が栄光に輝いて、他の人がまばゆくて見られない。そのためにおおいをかけた。おおいをかけるとは、罪が神様の栄光を遮っていることです。神様を直接見ることができない。だから後に神殿の中に、聖所と至聖所が隔てられました。そこに幕がかかけられました。イエス様が十字架にかかり、息絶えた時に、その幕が上から下に裂けたとあります。まさにその幕が今や取り除かれたのであります。かつてモーセが神の臨在の栄光に輝いた姿を、人々はまともに見ることができない罪の隔てがあった。それすらもイエス様は全部取り除いて、私たちの内に、キリストの霊を宿して下さったのであります。私たち一人一人に、キリストは住んで下さっている。そのことを自覚していく。案外普段の生活で忘れていきます。ここに主がおられます。主の臨在と共に生きること。それはとりもなおさず、私たちがキリストの性

質にまで、変えられていくことであります。

しかもそれをしてくださるのは、18節の終りに「これは霊なる主の働きによるのである」と。私たちが自分で努力して、なんとかキリストの姿かたち、栄光の姿になりたいと、踏ん張って、頑張って、何かするのではない。私たちにキリストの霊が働いて下さる。主の霊に従うこと。キリストの霊と共に生きること、言い換えますと、する事なす事、どんな事、日々のわざの中で、絶えず「主は何とおっしゃるだろうか」「イエス様はどうなさるだろうか」「ここでイエス様はどの道を選ばれるだろうか」、絶えずそこで主に思いを向けていく。そしてキリストの霊に導かれていく。「すべて神の霊に導かれている者は、すなわち神の子である」(ローマ8:14)と語られています。神の御霊に導かれていく生活。その時、思わず知らず、言わず語らず、キリストの姿が私たちのうちに映されていくのであります。造り出されていく。ですから、どうぞ、いつでも、どんな時でも、「今、私はこう言っているけれども、これは主が喜ばれることだろうか」、「私は今、これをしようとしているけれども、これは主が喜ばれることだろうか」「主が望んでいらっしゃるかどうか」、一瞬の間でいいですから、考えていただく。心にもう一度、思っていく。

これは自分で自覚してやらないとダメです。黙っていて、なるわけではない。常に自分が「主のみこころはいかに」「主

はこのところでなんとおっしゃるだろうか」、そこでいつも主の霊の導きに従う。従うことは、簡単にいかない。自分の思いがありますから、主のみこころと知りつつ、そこで戦いが生じます。信仰の戦いとはここです。イエス様はこう願っていらっしゃる。そう迫られることがありながら、やっぱりそれは、私はできないと言って、拒む自分がある。そういう自分のありのままの姿を早く知りたい。自覚したいと思います。

案外、人は自分の事を知らない。自分の事だから、自分は一番よく知っているように思いますが、到底それどころではありません。大いに買いかぶっていますから、始末に負えない。もっと、素直に、ありのままの自分になりきっていきける。そこまで自分を捨て去って、キリストと同じ姿に変えていただく。そのために神の霊、キリストの霊が常に私たちの内に働いて下さる。18節に「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」。主と同じ姿に変えられていく。

「エペソ人への手紙」4章11～15節を朗読。

12節に、「キリストのからだを建てさせ」とあります。このキリストのからだとは、その前のところからの続きで、キリストが教会のかしらであると言います。教会とは、前田教会という組織を指すように思いますが、そういう意味ではありません

ん。教会とは、私たち一人一人のことであります。私たちが神を宿す、神の御霊を宿す神の宮として建てられている。そしてそのかしらはキリストであります。その小さな教会である私たちが、ここに集うところにこそ、教会があるのです。それがこの世の目に見えるところの教会です。だから立派な塔の立った、壮麗な教会堂を建築してみたって、それは教会ではありません。ただの建物です。大切なのは、私たち一人一人がキリストのからだとなっていく。言うならば、キリストの性質に似るものとなっていく。変えられていなければならない。

このキリストのからだを建てさせ、さらに 13 節に、「**全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るため**」、全き人とは完全な人です。イエス様は父なる神様が完全であるから、あなたがたも完全になりなさいと、「マタイによる福音書」に語っています (5:48)。完全な者になるとは、キリストそのものになることです。といて、キリストにとって代わるわけではありません。キリストに全く似るものとなることです。さらに 15 節、「**愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである**」。私たちの信仰の最終目的地は、ここです。キリストの姿かたちに達する。その身丈にまで変えられていくことです。私たちのうちにキリストが造り出されていく。それは自分の力ではできません。誰の力によるのか。霊の働き、キリストの霊が、私たちの内にあつて、造り変えて下さるのですから、

常にキリストの霊に導かれていくこと。このキリストと絶えず交わる。主の霊によって、キリストとの交わりを持ち続けていく時に、私たちは変えられていくのです。いつ、どう変えられていくのか、わかりません。私は変わっただろうかと人に聞いても仕方ありません。大抵、変わってないと言われますから、そして失望します。だからそんなこと、聞かなくてよい。自らがキリストの霊に導かれて、つぶやきばかりであった人が、喜び、感謝に溢れ、柔和なものに変わっていくのです。失望、落胆して、打ち沈んでいる人が、上を向いて、賛美し、主をほめたたえる者に変えられるのです。それは内側から湧いてくる新しい力によります。それはキリストの霊です。神の御霊です。その霊が宿って、私たちを造り変えて、栄光から栄光へと主と同じ姿に変えて下さる。

もう一度、初めに戻りますが、18 節「**わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく**」。主と同じ姿ですよ。なんとすごいことか。神様の期待は大きい。自分を見ると、キリストのキの字もない。本当にちっぽけな者です。しかしそれを神様はキリストのからだにまで造り変えようと、今日も私たちの内に働いて下さる。いろいろな問題にあいます。悩みにあいます。悲しみにもあいます。しかしそこでこそ、私たちはキリストの形に変えられるために、主の霊に導かれていきたい。キリストの力に寄りすがって、キリストのなすわざ



に自分を委ねて、「主よ、みこころはいかに」と、絶えず主に慰められ、力づけられ、望みを与えられる日々でありたいと思います。そうする時、やがて気がつかないうちに、心も、思いも、なすわざも、語る言葉も、歩む歩みも、すべてが新しく造られたものとなっていく。やがてこの地上の生涯が終わる時、文字通り、キリストのみまえに立たせていただく。懐かしき主にお会いする時が来ます。そのためにこそ、今、日々、よみがえり給うた主と共に生きることを徹底して、まずそれを優先していきたい。そうすることが、この地上の生涯で実を結ぶものへと変えていただく道であります。

「栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」。主の働きが私たちの内に進められるように、絶えず思いを、心を、主に向けて、片時も主を忘れない日々でありたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。